



三春中学校だより

第 25 号

発行日 平成 30 年 8 月 22 日

発行所 三春町立三春中学校

電話 0247-62-2181 F A X 0247-62-6978

E-mail miharu-j@fcs.ed.jp

【教育目標】『三春に暮らす生徒一人ひとりに、将来に対して喜びと生きがいのある人生を主体的に創造する力を育み、地域に信頼され、ひいては、国際社会に貢献できる人材を育てる』

【“みはる寿司” オープン！ ～おいしそう、回らないお寿司店が美術科室前に！～】

夏休み中、校舎を巡回していると、3階美術室と技術室間のフロアに、さまざまな“ネタ”を使ったお寿司屋さんがいつの間にかオープンしていました。

美術科の授業で製作したお寿司でしたが、そのてかり具合や握り方はまるで“本物”。実においしそうでした。中には、造るのがたいへんそうな“エビ”に挑戦した生徒、いくらのつぶつぶを粘り強く造った生徒、イカに隠しき包丁まで入れていた生徒、キュウリとシャリとノリの3層構造のカップ巻きに挑んだ生徒、ネタの模様にこだわった生徒など、手が込んだ作品も多くありました。回転しているお寿司屋さんにはしか行ったことのない私には、カウンターに見立てたテーブルの上の、大きくて厚みのあるネタの載ったお寿司がとてもおいしく写りました。すばらしい作品ができあがりました。



【裏山がきれいに刈り込まれていました！ ～きれいな状況で夏休み明けが迎えられます。～】

夏休みになり、町の駐車場から校舎の裏山にかけて、わずかな人数で、のり面の草刈りが始まったかと思うと、お盆明けには、校舎一帯の草が刈り払われ、刈った草が枯れて茶色くなっていました。

草刈り機とはいえ、こんなに広い場所を刈るのはとてもたいへんだったと思いますが、人の力のすばらしさを感じます。おかげさまで、整った環境の中で夏休み明けを迎えることができます。本当にお疲れさまでした。そして、ありがとうございました。



【福島第一・二原発を見学してきました！ ～過去を省み、今、そして、未来に生きる～】

8月20日(月)に、田村地区小・中学校の校長28名が、東京電力福島第一・第二原子力発電所を視察してまいりました。

船引公民館に集合、バスで双葉警察署前の東電旧エネルギー館へ。一日の流れの説明後、第二原発へ。何重ものチェックの後、施設内に入りました。説明の中で、第一原発同様津波の被害をうけ緊急事態に陥ったこと、電源が一つだけ生きていたため最悪の事態は免れたこと、施設内すべてのモニタリングポストの値が0.3μシーベルト以下になっていること、すべての燃料棒をプールに移動し冷温停止状態を維持していること、予想される非常事態への対応準備ができていことなどがお話されました。その後、ヘルメットと防護メガネを持って4号機原子炉建屋内へ。薄いつなぎの防護服に靴下、手には手袋の上にさらにゴム手袋をつけ、専用の靴に履き替えて原子炉建屋から格納容器の真下に入り制御棒を間近で見学。酷暑の中、作業員の安全を考え、早朝や夕方からの作業タイムに切り替えているという説明もいただきました。汗だくになりながらバスに戻りましたが、作業員のみなさんは、連日、そのような状況下で作業に取り組んでおられるそうです。

旧エネルギー館に戻り、午後の第一原発視察の説明をいただきました。30～40年かかる廃炉にむけ復旧作業を安全に進めていること、1～4号機の冷温停止状態を維持していること、凍土遮水壁、舗装・フェーシング工事、地下水バイパスやサブドレンによる地下水くみ上げ等、汚染水を出さない取り組みにより建屋内への地下水等の流入が1日400トンから130トンに減ると共に、燃料デブリ安定冷却のための注水の結果出た汚染水を、62核種を除去できる装置で除染し、溶接型タンクに貯蔵していることなどをお聞きした後、第一原発へ専用バスで移動、厳しいチェック後、1～4号機

が見渡せる高台で復旧状況を見学、1号機上部の建屋カバーは外されがれきの撤去が始まり、2号機には建屋上部に前室がつくられ核燃料棒取り出しの調査を開始、3号機天井には、燃料取り出し用ドームを設置し年内取り出しの準備など、1～3号機の1573本の核燃料棒の取り出し準備をしているというものでした。4号機では、東京タワーの鉄量に匹敵するカバーを設置し核燃料の取り出しが完了。1～3号機の燃料デブリ取り出しにむけては内部調査がロボット等により進められています。また、フェーシング工事もあって簡易マスク・一般作業服作業エリアが96%になったことなどを理解しました。その後、原子炉の間を通過して海側へ。凍土遮水壁設備の太いパイプ、免震重要棟などを見学し、第一原発視察を終えました。

視察を終え、復旧の着実さが分かりました。30～40年という長期にわたる作業ではありますが、今後も安全・安心に作業が進むことを願います。東電の説明から、事故復旧だけでなく、人的・技術的貢献、損害賠償、風評払拭、産業・雇用回復・創出、再生可能エネルギー促進、まちづくり貢献、福島イノベーション・コースト構想推進など総合的な地域づくりに取り組んでいるという感を強くしました。

【『命の輝き』＝自分もまんざら捨てたものではない！】（前号よりの続き）

7 「自分もまんざら悪くない」を実感させる。

中学生としてのプライドを尊重し、わかりたいという思いをわかってもらうことで、次のわかりたい気持ちを育てることが大切である。また、より高い目標をめざすには、使えるものは積極的に活用し、すべてが生徒一人でできることにこだわりすぎないことも大切である。

(1) 「こだわり」に寄り添う。

「数学はやりません。」という自閉症のB男。大好きなアニメキャラクターの話にだけは笑顔で参加。そのアニメキャラクターの本をそろえ、番組はすべて見て、キャラクター人形の口を借り授業を始める。次第にB男は授業に関わるようになり、最後は、キャラクターの存在なしに数学の授業に取り組むようになった。

(2) 「君たちはすばらしい」と評価される学習を準備しよう。

① 宿泊学習

現地での自然学習に中心をおいた宿泊学習を計画。事前学習では、現地の地質の特徴を調べ尽くし、補助学習施設の存在も確認し、すべての授業を宿泊学習でつなげ学習し臨んだ。現地では、難しい鉱石の名前がどんどん出てくるのを校長先生にも補助施設の学芸員さんにも認められた。自分の仕事に誇りをもっているプロの職業人のみなさんは、その内容を誰かに伝えようと、誠心誠意対応してくれることも学んだ。帰ってきて子どもたちの学習意欲は衰えず、学んだことを家族や友人に伝えようとする姿があった。

② 劇づくり

行事の出し物として劇をやった。生徒たちは積極的に取り組み、精一杯の演技を披露し、「来年も劇やろうね。」との発言になった。ある時、偶然、舞台上で会場の笑いを誘った。別のシーンでも大笑いが起こった。自分の演技がお客さんの笑い声や感動につながることに楽しさを知ったことで、さらに子どもたちの意欲が高まった。ところがある時、練習を見に来た地域の小学生がある子の演技を見て大笑いしたのを、「笑うな。」と怒り出した。以前のバカにされて笑われた記憶がフラッシュバックしたのだ。演技が上手で笑っているんだよと指導し、母親には、テレビのお笑いを見て笑ったとき、「バカにして笑っているの？おもしろくて笑っているの？」と繰り返し質問してもらった。何日かして、「演技が上手で笑ったんだよね。」とその子。以後、練習にさらに磨きをかけ、大爆笑の舞台を繰り広げた。

あるお母さんからいただいた言葉。「去年、劇を見せていただいて、来年、自分の息子もこの舞台上に立てると思うとワクワクしてたまりませんでした。」

(3) 「学力」という希望

通常の教育課程で傷つき、自信を失い、大きな不適応と共に特別支援学級にやってくる子どもたち。この不適応感は、不登校や授業妨害、対人・対物暴力など、さまざまな形で姿を現す。生徒はほとんど全員が自分に対してとても低い評価をもっていて、「ダメな人間」だと思われている。

そんな彼らには、不適応の結果定着しなかった学力を高める一方で、人間関係においても自己評価を高め、「自分もまんざら捨てたものではない」という確信をもたせたい。日々の関わりの中で、少しでも自尊感情を高めるような取組を生み出し続ける必要がある。

(4) 特別支援学級の「友人関係」の大切さ

特別支援学級の中で、子どもたちは、同じ境遇で苦しむ仲間がこれほど多く存在することを。苦手だった学習に共に取り組み、宿泊学習や劇づくりを通して拍手喝采をあげる。仲間と共にわかりたかったことがわかることで次のわかりたいがうまれる。これらの地道な取り組みから、「まんざら捨てたものではない」自分から、「すばらしい」自分へ少しずつ確信を深めていく。

(5) 「将来展望」と特別支援学級

将来の夢を尋ねると、知的に高い生徒ほど「わからない。」と答える。失敗体験の積み重ねから、自分の願いは実現されないと考えている。「叶わない願いなら願わない方が傷つかずにすむ」ということを学習している。しかし、今を楽しく生きることが将来の希望につながることもあるのではないか。子どものうちに幸せをいっぱい貯金して将来に備えたい。教育する側は、その幸せの確認のための再会の場を用意する義務がある。「豊かで良質な思い出は、人が生きる支えになる。」

8 終わりに

信頼される大人になろう。信頼される教師になろう。子どもは信頼できる大人を待っている。

(その5 以上で紙上演説会を終わります。)